

令和3年度 研究報告書

子どもの安心感の意義を考える

～不登校の子どもの支援実践事例を通して～



認定特定非営利活動法人
教育活動総合サポートセンター

はじめに

文部科学省が2021（令和3）年10月14日に、2020年度の「問題行動・不登校調査」を公表しました。それによると、全国の国公立の小中学校で、30日以上欠席した不登校の児童生徒は19万6,127人で、前年度より1万4,855人増えて過去最多でした。また、新型コロナウイルス禍の学校に、さまざまな影響が出ていることも浮き彫りになったそうです。制限続きの学校生活で漠然とした理由の不登校が増加するとともに、感染対策に追われ教員の多忙化に拍車がかかるという学校現場の状況が見えてきたようです。

認定特定非営利活動法人教育活動総合サポートセンターは、平成16年4月の設立から18年目を迎えました。設立の理念「子たちに力を！」の合い言葉を基に、3つの「こどもサポート」では、特に、「①基礎基本を重視した学習支援により、学力の充実を図る。また、様々な体験活動を通して、学校への復帰や社会への参加を支援する。」「②家庭・学校・地域及び関係機関との連携を深め、相談活動を中心とした社会福祉活動の充実を支援する。」「③一人ひとりの児童生徒が自立し、心豊かに生きていける力を身につけられるよう支援する。」という活動方針を重視してきました。

3つの「こどもサポート」に共通する点としては、電話や面談による教育相談、「保護者の会」の開催、区役所など関係諸機関との連携、不登校に関する自主研究等が挙げられます。「こどもサポート宮ノ下」では、マンツーマンの個別学習を柱として、子どもとの人間関係を大切に活動が中心です。「こどもサポート南野川」と「こどもサポート旭町」では、学習・友達とのふれあい体験活動・料理・お茶・レクレーションなどを通して、多様で安心な居場所づくりに努めています。

子どもの不安や悩みに保護者や周りの大人が気づけないと、孤立感を深め、不登校やうつ傾向につながることもあります。しかし、いきなり「何か困っていることはある？」と聞かれても、戸惑って「ない」と答えてしまう子どももいます。子どもから話しかけてきやすいような関係を作ることが大切だと思います。

今年度は新しい研究部員も2名加わって、研究テーマ「子どもの安心感の意義を考える～不登校の子どもの支援実践事例を通して～」というテーマで取り組むことになりました。

昨年度に続くコロナ禍の中でのささやかな実践的研究ではありますが、所員一同が真剣に子どもたちと向き合ってきた実践の足跡でもあります。この今日的課題の取組について、忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

研究にあたり、きめ細かなご指導、文部科学省の動向や社会情勢等に関するご示唆をくださった横浜国立大学名誉教授岡田守弘様、貴重な資料をご提供くださった川崎市教育委員会等関係機関の皆様にご心より感謝を申し上げます。

なお、本研究報告書で取り上げた事例等の記載に当たり、個人情報保護に関する配慮を行っておりますが、取り扱いについては特段のご配慮をお願い申し上げます。

認定特定非営利活動法人 教育活動総合サポートセンター
理事長 前田 博 明

研究テーマ 子どもの安心感の意義を考える

～不登校の子どもの支援実践事例を通して～

I 研究テーマの設定にあたって

◆「不安」から「安心」へ

昨年度までの2年間、「子どもに寄り添った多様な支援の実現に向けて」を研究テーマに、子どもの「不安」に注目して研究を行った。これは、一昨年までの川崎市の不登校に関する調査で、不登校の要因として、「不安の傾向がある」が最も多く挙げられていることを受けてのものである。この不安の中身を解明することができれば、支援の仕方が見えてくる。何より、子どもの不安に気付き、不安な気持ちそのものに寄り添うようにしたいと考えたのである。

次の表は、川崎市が発表した令和2年度の不登校の要因である。

不登校の要因 令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等の状況調査結果から

		学校に係る状況							家庭			本人		左記に該当なし	
		いじめ	友人関係	教職員との関係	学業の不振	進路に係る不安	クラブ・部活	学校のきまり	入学・転編入学	生活環境の変化	親子の関わり方	家庭内の不和	生活の乱れ・遊び ・非行		無気力・不安
小学校	①	0	35	17	17	3	0	6	8	13	101	16	77	483	31
	②	0	25	9	73	4	0	10	5	9	111	8	57	46	
中学校	①	0	82	7	44	12	8	5	45	17	41	26	100	964	19
	②	0	75	5	88	11	10	7	21	10	41	7	57	92	

① 主たるもの ②主たるもの以外 —川崎市教育委員会— 令和3年10月13日

小学校・中学校ともに、「無気力・不安」が圧倒的に多くなっている。令和元年度の調査から、「無気力」と「不安」が一緒になったため、不安が単独で占める割合は分からなくなった。しかし、一昨年までの調査結果から、依然として不安が大きな割合を占めているものと考えられる。

この調査は学校からの報告に基づくものであり、子どもが回答すれば異なる結果になる可能性がある。ただ、不登校の要因は複雑に絡み合っているため、子ども自身、要因を特定することは難しいと思われる。また、要因を説明することも、子どもにとって難しいことである。

不安は目に見えるものではないだけに、周りの者は気付にくい。それだけに、不安の中身を考え、その不安に寄り添うという昨年までの取り組みには、一定の意義があったと考えている。子どもへの関わり方としては、子どもの不安を受け止めることを心掛けた。具体的には、子どもの話に耳を傾けることに努めた。まずは、「あなたの味方だよ」ということを伝えたい。子どもの話を聴くことは、支援スタッフが最も多く行っていることで、常に意識していることである。

子どもに限らず、不安は、たやすくなくなるものではない。一つの不安が軽減したとしても、新たな不安が生まれる。あるいは形を変えて襲ってくる。支援スタッフに求められるのは、もぐらたたきのように、それらの不安をつぶしていくことではない。不安は不安として受け止める。そのこ

とによって、当サポートセンターで過ごす間だけでも、不安を忘れて過ごすことができる。その時間の積み重ねが、子どもの中に少しずつ心のエネルギーを溜めていく。子どもが安心して居られる場所であることこそ、当サポートセンター設立の原点である。それを再認識し、これまで通り不安を受け止めながら、どのようにして子どもの安心を広げていくか、そして、その安心が子どもに何をもたらすかを考えてみるために、本研究テーマを設定した。

◆「安心」がもたらすもの

私は中学1年生の頃からサポートセンターに通い始め、主に国語と英語を学んでいます。通い始める前は、家にいてもどうにも勉強ができず、同年代の人たちと比べては不安になっていましたが、サポートセンターに通い始めてからは、「自分も少しは勉強ができている」という事実が安心につながり、国語などは学校の定期テストでそれなりの点数をとれるようになってきました。今年からは高校のことも見すえて、色々なことをがんばろうと思います。 (中3 Mさん)
「波紋」18号 (令和3年5月1日発行) より

当サポートセンターは、1年間の活動を記録し、広報紙「波紋」を毎年発行している。左の作文は、令和3年度の「波紋」18号に掲載したものである。

Mさんは、同年代の子どもと比べて不安になっていたが、通所することで勉強ができるようになった。それが安心につながったと綴っている。そして、色々なことを頑張ろうと思うようになった。

安心は、安心という心の状態にとどまらず、自ら頑張ろうと思う気持ちを生み出ししている。

Mさんが、高校進学を見すえて頑張ろう

と思った「色々なこと」とは、何だろうか。これまで以上に学習に励むこと、登校回数を増やすこと、あるいは生活のリズムを整えることかもしれない。その他、まったく予想しなかったことかもしれないが、ここに支援の方向性が見えてくる。

頑張ろうとすることは子どもによって千差万別で、頑張った結果もそれぞれ異なったものとなるが、本人の力と周りの支援の相乗作用の結果である。子どもの変化を見逃さず、相乗作用の起点となっている安心の意義を考えたい。

Ⅱ 研究の進め方

◆安心感の「感」

昨年度までの研究を受けて、子どもの安心に目を向けようということは早い段階で決定した。不安を中心としていた昨年度も、不安に対比する形で子どもの安心に目を向けてきた。子どもが安心しているように見える場面を見つけ、それを手掛かりにその子どもの安心感を広げようとしたのである。言葉かけに気を遣い、些細なことをほめて、認めて自信をもたせようとした。今年度、安心に目を向けようと言っても、昨年度と同じことをやるようになるのではないか。そうであるなら、昨年度のメインテーマ「子どもに寄り添った多様な支援の実現に向けて」は、そのままでよいのではないかという意見もあった。

「子どもに寄り添った多様な支援の実現に向けて」は、言うなれば、変えようのない永遠のテーマである。当サポートセンターは、そのためにこそある。しかし、昨年度のままだでは、安心の方へ軸足を移すことが分からない。そこで、「安心(感)」という文言をテーマに盛り込むこととした。

最終的に文言を決定する段階で、「安心」とするか「安心感」とするかが検討された。どちらにしても、行きつく先は大きく変わることはなさそうである。しかし、安心感はいくまでも子どもが抱くものである。子どもによって感じ方は様々である。私たちは、そこを大事にしよう。その思いを込めて、「安心感」とした。

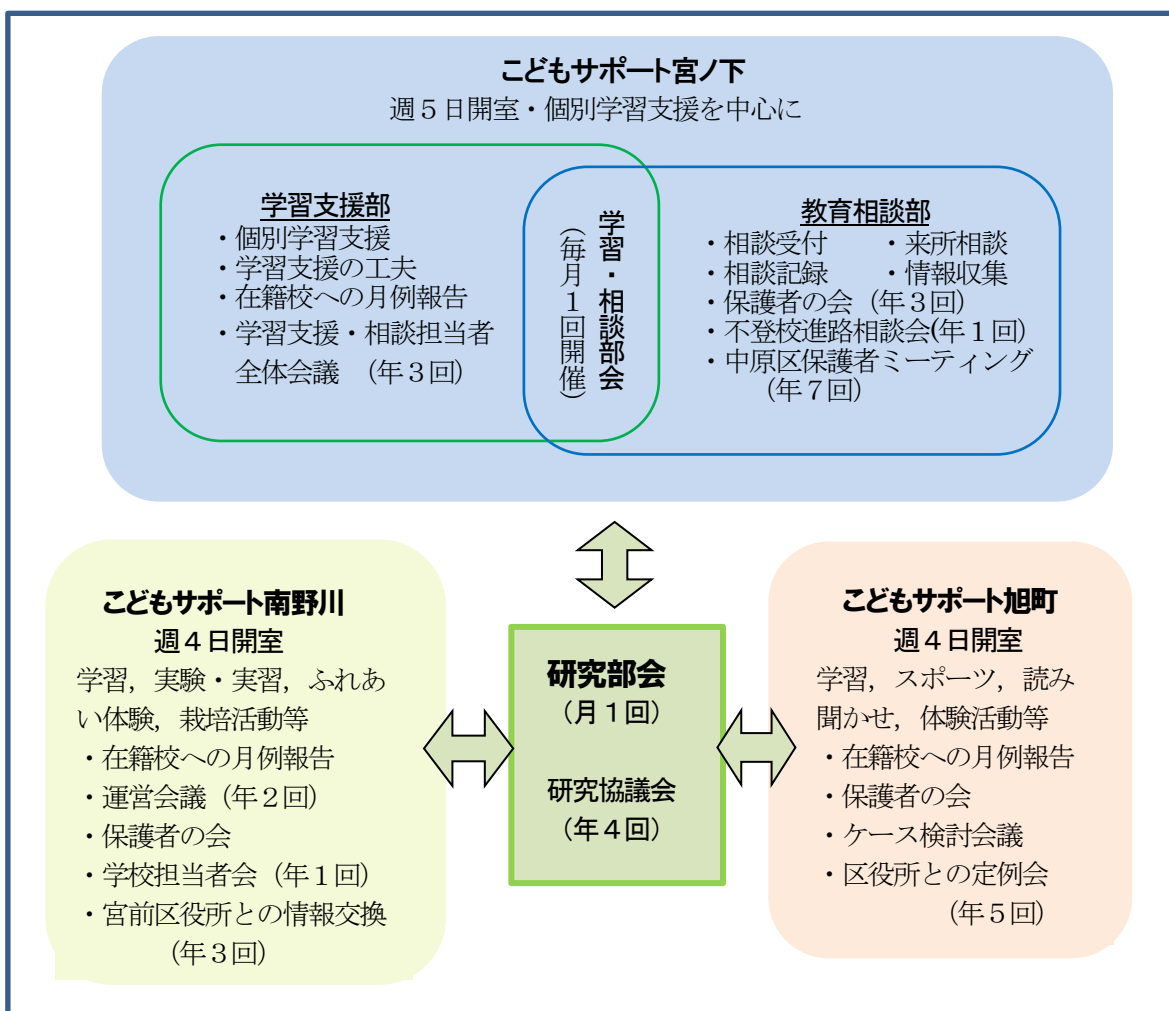
◆通所の継続が安心感の目安

子どもの安心感を、何で把握すればよいのだろうか。安心感は目に見えない。不安と同様、表情や言動などから推察するしかない。自信のあるなし、自己肯定感、自尊感情の面からとらえられないかと話し合ったが、結論を得ることはできなかった。

そこで、子どもが通所できているのは、なぜかということから考えることにした。本人の特性や発達段階、家族の事情、支援スタッフや他の通所者との関係など様々な状況の中で、通所が続くのはサポートセンターが居場所になっているからである。楽しい、ほっとする、好きな過ごし方ができるなど、子どもによって通所する理由は様々だが、安心感をもっているから通所できていると考えて進めることとした。

支援スタッフは、子どもの安心感を高め、損なわないように努め、通所が途切れないように最大限の配慮を行っている。子どもは、今日来所しても、次回も来るとは限らない。そこで、子どもの通所の状況を安心感の目安とした。

◆研究の推進体制



* **研究部会**：理事長・事務局長及び各「こどもサポート」の研究部員10名の計12名で構成する。

* **研究協議会**：上記研究部会に、岡田守弘横浜国立大学名誉教授に入っただき構成する。

岡田守弘先生には研究協議会の委員長として、研究全体を統括していただいた。

連携・協働をすすめる機関

- ・学校（通級指導教室，相談指導学級を含む）
- ・総合教育センター（教育相談センター，特別支援教育センター，ゆうゆう広場）・家庭訪問相談員
- ・各区のSSW ・区の地域みまもり支援センター ・福祉事務所 ・児童相談所 ・児童養護施設
- ・発達相談支援センター ・民生委員児童委員 ・保護司 ・医療機関 等

Ⅲ 実践事例

研究部員が関わっている実践事例を持ち寄り，何によって安心感が生まれているのか，逆に生まれていないのか，子どもの特性への配慮は妥当なものかなどを検討することとした。経過を追うより，日常の子どもとの関わり的一部分を切り取って持ち寄ることとした。それらを分類することで見えてくるものがあるのではないかと考えたのである。

その結果25例が集まり，どのように分類できるのかを検討した。しかし，実践事例には，似通ったところがある。また，一つの実践事例の中に複数のエピソードがあり，エピソードごとに数えると39例となり，明確に分類することは難しい。そこで，本報告書には，似ているものごとに，便宜上次の4つに分けて載せることとした。

- A 自分のペースで学習できることや学習が分かるようになったことで安心感を得られた例
- B 得意なことや特性が認められることで安心感を得られた例
- C サポートセンターが居場所となり，ありのままの自分が出せるようになるなど，スタッフや他の通所者との人間関係が安心感につながっている例
- D 保護者との連携が安心感につながった例

なお，エピソードで分けると，Aが9例，Bが4例，Cが16例，Dが4例，その他が6例であった。本報告書には，個人や学校等が特定されないように配慮して，AからDまで，それぞれの代表例を載せている。研究報告会で報告を行う予定の実践事例については，その配慮を行った上で，子どもの様子や経過の一部，支援の内容をより詳しく記している。

実践事例のタイトルは子ども側に立った表現にそろえているが，支援の前の状態をつけるか，支援後の様子からつけるかは事例の提供者に任せ，分かりやすいものとするように努めた。様式も事例により多少の違いがあるが，個々の経過の違いに合わせることを優先した結果である。

◆学習支援スタッフのつぶやき

実践事例のページに，吹き出し形式で表した「支援者のつぶやき」を挿入している。これは，「こどもサポート宮ノ下」の学習支援スタッフに，子どもの安心感に関わるエピソードや個人の考え等を書いてもらったものである。

学習支援スタッフは，常に「次回も来てくれるだろうか」という不安を抱えている。特に，個別の学習支援を行っている「こどもサポート宮ノ下」の場合は，学習支援スタッフ同士が顔を合わせる機会がほとんどないため，その不安を共有することが難しい。「支援者のつぶやき」には，学習支援スタッフの悩みや本音も含まれている。現在，行っている個々の支援と「こどもサポート」としての支援体制を考える材料となると考え，挿入することとした。

◆新型コロナウイルスの影響と対応

新型コロナウイルスは，子どもにも大きな影響を与えた。感染状況は違ってきているが，影響は今も続いている。私たちは感染防止に努め，支援の継続を図ってきたが，影響は今後も続くと思われる。新型コロナウイルスの影響だけではないが，子どもたちの学び方も変わってきている。支援の在り方にも影響が増してくると思われる。そこで，今年度の研究と直接つながるものではないが，子どもたちへの影響と当サポートセンターの対応をまとめたものと，実践事例一つを記録として残すこととした。

「子どもの安心感」って…

支援者のつぶやき

「学校に出す作文を書かなければ
ならないから、休みます」と、本人から
電話があった。「作文、ここに来て一
緒に考えようか」と声を掛けたら、来
るという。来所して、自分で考えてき
たことを話す中で、出てきた言葉で文
を膨らませ、作文にまとめた。帰る時
の顔には自信が見えた。

出会った時は、自信がなさ
そうな印象だった。こちらが
指示をするのではなく、一緒
に考えていくようにして、学
習を進めていくとよいので
はないか、と思った。

寄り添う 一緒に考える

中学生の子どもだが、妹がいて年
下の子どもの面倒をみるのが好き。
そのせいか、スタッフが、寺子屋(注)
で小学生の対応に困ったことや悩ん
でいることなどを話すと、よくアド
バイスやアイデアをくれた。それ
によって自信が持てるようになり学習
意欲にもつながったように感じた。

学習の項目をいくつか示し、
自分で進める順番を決めるよ
うに声をかけると、いろいろ考
えながら真剣に予定を立てた。
自分で決めた予定通り、時計を
見ながらやっていた。「やらせ
られ感」がないのが安心なのだ
ろうか。

学習の前後で、必ず前の
学習の確認と、今日の学習
の振り返りを自分からや
っている。わからないこと
があると、質問してくる。
とてもいいことだと思っ
ている。自分が納得するこ
とで安心するのか。

自分なりの やり方で

お気に入りの漢字プリント
が見つかり、楽しそうにやっ
ている。「漢字は得意！」とい
う言葉も出るようになった。

パソコンの学習で、全国を旅してク
イズに答える学習ソフトを気に入
っている。観光地や特産物などにも興
味を持って楽しんでいる。

(注)「寺子屋」については、P.52「地域の寺子屋」参照

基礎的な力が身についていかないのは本人の能力の特徴かもしれない。「自分の能力に合った学習ができ、理解できる」それが、この子どもの安心感。

学校のオンライン学習には時々参加しているが、「勉強がわからない」と落ち込む。「友達には会いたいけど、勉強がわからないから」と登校の不安を話す。

わかる できる

やり方がわかってきたら、安心した様子で学習に向かう。「疲れたら休んでもいいよ」と言っても、「大丈夫」と、熱心に学習を続けた。

家庭以外の経験が少ないため、英語の教科書に出てくる場面のイメージが、持っていない。様子が変わるような説明や、他の子どもの体験談などを話すと、場面が理解できたようで、安心した表情を見せた。

子どもの「わからない」の原因をつかんで、教科書の中に散らばっている知識を、その子にあった学習内容に整理して提示しています。「分数がわからない」という言葉から、小学校の分数の学習から進めると「中1の数学もわかるようになってきた!」と「安心感」を持ち、学習の意欲につながりました。

自分に合った 学習ができる

「書く」ということは、自分を見つめることにつながる。「対話しながらメモを作り、じっくり振り返り、組み立てを考え、言葉を選んで記述する」という体験の積み重ねを通して、子どもは、心の安定（安心）をつかみかけているように思う。

「こどもサポート」に毎週通い、学習する。このルーティーンが、この子どもの安心感になっている。

自分の ルーティーン

これまでに、英語の学習を1回だけ休んだ。理由は、「家で、翌日の定期テストの勉強をしたい」ということだった。学校の定期試験は、英語は受けず、その他の教科は受けているので、よい判断だったと思う。

しばらく休みが続いても、聞きたいことやわからないことがあると、来所して熱心に質問し、学習していく。来なかった間のこともよく話してくれる。安心して自分のペースで「こどもサポート」を利用している。

「子どもの安心感」って…

支援者のつづやき

思いを話す

学習に来ると、まず興味のあるアニメや家族のことを自分からよく話してくれる。学習前によく聞くようにしている。それが安心感につながっていると信じている。

「安心」や「安心感」に直接かわるかは「？」ですが、登校した時の学校での様子をよく話してくれます。その話の中で自分の考えも入れて「こう思う」とか「こう考える」など話してくれるので、なるべく話を聞き、それから学習に入っています。

今日も受け答えの声が小さい。何回か学習しているが、まだ緊張しているのか。でも、テスト問題を持ってきて、自分から「これをやりたい」と言ってきたのは変化の兆し!?

いろいろなことが気になり、気にしすぎて腹痛になり、トイレに駆け込むことが多いようだ。思いを口に出すことは、子どもの気持ちを和らげることになる。実際、話すことが大好きで、話し出したらなかなか止まらない。一度、本人に確認の上、学習時間のすべてを使って話を聞いた。次に来た時に、「少し吹っ切れた!」と明るく言っていた。

私が「訳してみて!」というと、自分で訳した後に、必ず「こんな感じかな…」と、自信なさそうに首をかしげていた。「その言葉、いらないよ」と言ったが、直後にまた「こんな感じ…」と言いかけて、「あ、口ぐせ!」と言って笑った。でもそれ以後、言わなくなった。

学習の前に、この1週間の中で「楽しかったこと」「いやだったこと」を話すようにしている。毎回、たくさん話してくれる。「いやだったこと」について、「こうしたらどうかな」などとアドバイスすると、安心したような顔をしています。

会話する

来所すると、おしゃべりの時間が多い。自分のこともよく話す。「こどもサポート」のスタッフには、安心感があるのかもしれない。第三者や同学年の子どもとはあまりしゃべる様子はない。欠席連絡の電話をくれる時も、電話で10分以上話をすることが多い。

「子どもの安心感」って…

支援者のつづやき

「こどもサポート」に通う子ども達の中には、人間関係・家庭・健康等、自らは好まざる経験をし、傷ついている者がいます。その心の痛手が仕草や表情に表れます。故に、経過等を参考にして、進学を控えた学年の子どもには、自らの失敗談や人生の回り道について話したり、現職時代に関わった教え子の成長の様子などを話したりして、自らの将来について悲観的にならず、希望をもてるようになってほしいと思って対応しています。

忘れっぽいことを気にしているように見える。その日の学習内容や、次回の予定、持ち物やお休みの費など、必要に応じて一緒に確認したり、メモを書いて渡したりすると安心した様子を見せる。

病歴のある子どもなので、病気や入院などに関する話題に気を使いたないようにしています。最近の通院状況や体調などについて話題にできることで「安心感」を感じているように見えます。

不安に気づく

自虐話をしたり、様々な経験談を話したりして励まそうとしてきましたが、私の思いとは裏腹で、色々話すことが逆効果の場合もありそうだなと感じています。

疲れたり、気が乗らなったりする時は、学習がなかなかかどらず、関係ないおしゃべりが続いたりふざけたりしてしまうことがある。学習に対する集中力は本人の心の在りようとも関係するので、こういう状態も受け入れて、長い目で見えるように心がけている。それが、本人の「安心感」につながると考えている。

「子どもの安心感」って…

支援者のつぶやき

一見朗らかで活発な印象を受けるが、周りの音や雰囲気敏感に反応する様子が見られました。虚勢を張っているように見えました。
でも好きなアーティストの話をするとうれしく、リラックスして楽しんでいる感じがしました。

英語に苦手意識が強く、やる気が出ないようだ。英語についてゲーム化したり、好きなアニメに結びつけたりして、本人の興味を中心に毎回活動を準備している。ほとんど休むことなく通所している。

好きな歌や、お話の絵本に触れていると、安心した様子が見られる。

好きなこと
得意なこと

学習を30分くらいやると飽きてしまうので、終わりにゲームをやる時間を作っている。ゲームに勝つことや褒められることで、安心感や自信を得ているようだ。

メインの学習は数学だが、その時間は少しにして、本人と相談しながら、教科にこだわらず興味のある学習に取り組むようにしている。食べ物、花など、関心のあることを調べる作業には、集中して、熱心に取り組んでいる。

以前は、学習後に外で遊びたかったが、今は外に行くことよりオセロに興味を持ち、スタッフ相手にゲームをして、勝つと喜んでいる。実力もかなりあり、考えながらゲームをしているのがわかる。同じ時間に学習に来ている子どもと対戦した時は、僅差で負けたが、それでも「まだやりたい!」と喜んでた。

折り紙が得意で、やり始めると止まりません。スタッフと相談して、初めに自分で「〇〇分間勉強してから、折り紙をする」と決めると、その間は、時計を見ながら勉強に集中しています。時間になると「折り紙をやる!」と言って始めるようになりました。難しい折り方でもすぐに覚え、スタッフができないと喜んで教えてくれます。「こどもサポート」に通う原動力になっているようです。

「子どもの安心感」って…

支援者のつぶやき

「登校した時、おじいちゃんが優しくなった。ぼくが学校に行くのが嬉しいみたい」と話す子どもの表情も、柔和で嬉しそうだった。

初回面談で緊張していたが、母親が「両親とも無理に学校には行かなくていいと思っています」と言った時は笑顔で聞いていた。

家庭学習をよくやっているが、ほとんど母親に教えてもらっているようだ。「こどもサポート」で学習していても、言葉の端々に保護者の影を感じる。「常に腹痛がある」という子どもの言葉が気になる。

子どもの思い
家族の思い

連休に家族で祖母の家に遊びに行ったことを、珍しく自分から話してくれた。家族や祖母とみんな過ごすことに、「安心感」を感じているようだった。

私には泣き言は言いませんが、学校でも「こどもサポート」でも、話を聞いてくれる優しいお母さんを求めている様子がうかがえます。私の前では精一杯頑張っちゃっているのかもしれない。

計算に自信がないようなので、ミスを気にしないで自由に取り組むよう話しながら学習しています。

ある時、両親が学習支援担当の教え子であることがわかり、本人にも笑顔が多く見られるようになったと思います。

新型コロナウイルスの影響と対応

新型コロナウイルスの流行は、当サポートセンターにも大きな影響を与えた。2020年3月、国内に最初の感染が広がって以来、「三密」を避けるように努めてきた。学校が一斉休校になった際は、それに合わせて学習活動を休止し、電話による相談のみとした。

当サポートセンターがクラスターの発生源となってはいけない、その思いで、基本的には学校の動きに合わせて、学校が休みの場合は当サポートセンターも休みとすることにした。当サポートセンターには、それぞれ違った学校に在籍している子どもたちが通ってくる。そこで、個々の学校の感染状況を知るために、毎朝、市のホームページを見るようにした。また、各家庭には、通所する前に検温を行い、熱がある場合は通所を見合わせるようお願いをした。

感染防止策

- ◆手洗いと三密の防止の徹底。窓は極力開放し、サーキュレーターを3台設置し換気に努めた。
- ◆一日に三回のアルコール消毒。(机やパソコンのキーボード、電話の受話器、トイレのドアノブ、鉛筆等多数が触れる場所・物を重点的に)
- ◆来所者とスタッフの検温と手指消毒
- ◆机の配置の工夫(子どもとスタッフが正面に位置しないように)

◎一斉休校が終わり、分散登校が始まると、子どもたちはおおむね次の3つに分かれた。

- ・学校に行き始めた子ども(週に数日という場合も含む)
- ・当サポートセンターへの通所を再開した子ども
- ・学校にも行かず、サポートセンターにも来ない子ども

◎徐々に学校が以前の形になるにつれて、再び学校に行けなくなる子どもがでてきた。新型コロナウイルスの感染が始まって以降、保護者からの相談の申し込みも減っていたが、今年度の中頃からは新規申し込みも増えてきた。登録者の数は例年と変わらない数となっている。ただし、申し込みはしても通所ができないケースが目立つようになっている。長引くコロナ禍により、想像以上に保護者や子どもの疲弊度が増していることが懸念された。

子どもたちの活動も様々な制約を受けたが、学習に関しては大きく変わることはなかった。ただ、学校でオンライン授業が行われるようになったことを受け、当サポートセンターもタブレット端末を整備して、子どもたちのニーズに備えた。次ページに、その一例を載せる。

新型コロナウイルスに関わるエピソード

うちの子は大丈夫ですけど…

学校に感染者が出たので、通所を見合わせていただきたくと保護者に電話をした。保護者は了解しながら、「うちの子は学校に行っていないから、大丈夫だと思いますけど?」と笑い声で言った。「学校に行かせなくていいと思うと、ホッとします。」とも…

大量のマスクにびっくり!

マスク不足が続いていたとき、ある会社からマスクを差し上げたいという電話が入った。「何箱お届けしましょうか。」と言われ、「3箱ほどいただければ…」と応えた。

数日後、巨大な段ボール箱が3つ届いた。3つ

合わせて、推計2万枚。早速、各「こどもサポート」と事業所に配って、子どもや利用者に使っていただいた。

心の支えなんです

緊急事態宣言が解除された直後、〇〇さんから電話。〇〇さんは、コロナウイルス感染が流行りだしたとき、いち早くお子さんの通所をとりやめた方だ。少し収まってきたことを受け、通所を再開させたいという電話かと思いきや、違った。

「収まってきたからといって、決して無理をなさらないでください」というお話だった。「先生方が心配です。サポートセンターは、私の心の支えなんですから…」と。

IV 研究のまとめ

◆スタッフと子どもの関係

研究部員が持ち寄った実践事例を見ると、スタッフとの関わりに関するものが最も多かった。好きなことができるのも、自分のペースで学習できるのも、その子にとって「こどもサポート」が安心して居られる場所になっているからである。スタッフに認められたり、ほめられたりすることがうれしい。励まされながらも、何かをやりとげることで自信を取り戻している。また、かたくなに距離をとっていた子どもが、自ら関わりを求めようになった例も見られる。こうしたことは、スタッフとの関わりから生まれたものである。

スタッフは、子どもを丸ごと受け入れようと、常に肯定的に接しているが、これはとても難しいことである。どんな言葉をかけても、子どもが受け止めてくれなければ意味をなさない。「あなたの気持ちは、よく分かるよ」と繰り返しても、それだけで通じるものではない。子どもが「この人は、分かってくれるんだ」と思ってくれるかどうかにかかっている。子どもの方がスタッフを受け入れてくれなければ、たとえ、どんなほめ言葉を並べても、嫌みを言われているようにしか受け取れないだろう。また、スタッフは、もしかしたら聞き入れてもらえないかもしれないと思うことも、子どもの状況に応じて提案しているが、「この人が言うことだったら、やってみようかな」と思ってくれなければ、子どもが実行することはなかったと思われる。

スタッフと子どもが相互に受け入れられる関係にあることが望ましく、スタッフはまずそれを目指して接している。しかも、それは対等な関係が望ましい。子どもによっては、「スタッフの言うことは受け入れなければ」と考えることがあることに注意する必要がある。また、「スタッフが待っていてくれるから、行かなくてはい」と思うようなことがあれば、「こどもサポート」がその子にとって、学校と同じようになってしまう。通所が続くことを願いながらも、無用なプレッシャーを与えていないか、常に顧みることが必要である。

子どもとの関係は、容易にできるものではなく、明日にも切れてしまうかもしれないものである。スタッフにとって、一回一回の来所が勝負である。結果的に通所が続いているところを見れば、子どもの安心感を損なわない支援ができていると考える。

◆学習支援を通してねらうもの

私たちは令和2年度の研究の一環で、通所している子どもたちに、「こどもサポート」でやりたいことを聞いている。そこで、最も多かった回答が「勉強をしたい」(57.9%)だった。「進学準備、勉強がしたい」(42.1%)がこれに次いだ。(複数回答可)

川崎市の令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等の状況調査結果で、学校に係る状況で最も多い不登校要因となっているのが、学業不振である。ちょっとしたつまずきから学習が遅れだし、ついていけなくなる。感覚過敏で教室のザワザワ感に耐えられない、集団の中にいるのが苦しいなどの理由で、授業を受けられず、ついには学校にも行けなくなる。しかし、私たちが行ったアンケート調査から、学校に行けなくても「勉強をしたい」と思っている子どもが多いことが分かる。したがって、不登校の子どもたちへの学習支援を、どのように進めるかが社会的課題となっている。

「こどもサポート」もこれを受けて、学習支援を大きな柱と考えている。子どもの興味や関心のあるものを使って、緩やかに学習への導入を図っている。学力に合わせた学習内容を、子どものペースを大事にしながら進めている。子どもの理解を助けるために教材を工夫している。掲載した実践事例には、子どもの学力が少しずつ伸びている様子が記されている。子どもは、「わかるようにな

った」「できるようになった」ことで、うれしさや楽しさを味わい、それが、通所意欲を高め、維持している。

これは、単に学習ができるようになったというだけではない。自分は頭が悪い、自分はダメな人間だという自己認識を変えた。スタッフは、学力向上のみを目標としていない。周りと比べて劣等感に苛まれている状態から、何とか脱してほしいと願っている。そのために、ほとんどのスタッフが学習以外のことにも時間を割いている。「支援者のつぶやき」にも見られる通り、雑談やゲームなどに費やしているが、時には「どうして学校に行かなきゃいけないの」「何で勉強しなきゃいけないのか分からない」といった疑問をぶつけられることがある。改めて聞かれると、答えに窮する疑問である。スタッフはこれを受け止め、一緒に考える。子どもが求める答えは見出せなくても、子どもとの関係はより深まったと考えられる。

◆リモート学習に対する考え方

新型コロナウイルスの流行で、リモート学習が一気に広まった。不登校の子どもの教育機会確保という観点から、リモート学習が一つの有力な方策ではある。今後、新型コロナウイルスが終息したとしても、GIGAスクール構想が始まったことも相まって、学習形態がもとに戻ることはないだろう。リモート学習が合う子どもも多いだろうが、その一方で、それに馴染めず不登校になる子どもも出てくるのではないだろうか。

私たちも、リモート学習を必要とする子どもが支援を求めてきた場合、これに応えられるように備えを進めておく。ただ、リモート学習がどれだけ進んでも、現在見られるようなスタッフとの生き生きとした関わりは生まれにくいのではないだろうか。不登校の子どもにとって、家を出て通所することに意味があるのである。私たちは、そこを大事にして支援を行っていきたい。

◆保護者とともに

川崎市の調査（令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等の状況調査）によれば、不登校の要因として「親子の関わり方」も多くを占めている。親の過剰な期待や登校の強制などによって、時には子どもは苦しい状況に陥る。子どもなりに親に心配をかけまいと頑張るが、どうしてもならず不登校状態になる。ただ、苦しいのは親も同じである。

実践事例では、そんな親にスタッフが寄り添う姿が見られる。親の考えを尊重しながら、苦しい気持ちに共感を示し、支援を行っている。これによって、子どもへの親の接し方に変化が見られるようになり、親子関係が変わっていく。徐々に親子を包んでいた苦しみが和らぎ、子どもにとって最も居場所たるべき家庭になっていく。忙しい日々を送る親に直接会う機会はなかなか得られないのが現状だが、親への支援を考えることは、子どもを支援する上で極めて重要なことである。

私たちが昨年度行ったアンケート調査の中で、「こどもサポート」に通うようになって、子どもに

- ・食欲が回復して元気になった。
- ・イライラが減った。
- ・自信が持てるようになった。
- ・勉強意欲が増した。
- ・少しずつ外へ出るようになった。
- ・早く起きるようになった。
- ・自分から勉強するようになった。
- ・人に会いたくないと言っていたが少し改善された。

どんな変化があったかを保護者に聞いている。左の枠内は、その回答の一部である。子どもの変化だけではなく、保護者自身の変化として「子どもに声かけすることが少なくなった」という記述があった。子ども自身が成長したこともあるが、保護者もよい変化を遂げ、よい親子関係ができたことがうかがえる。

こうした親子関係の変化と左枠内の子どもの変化は、子どもの安心感が形になったものである。今後も、子どもが安心して過ごせる居場所づくりを進めていきたい。